

乳幼児精神発達検査にみられる

両親評定と教師評定の差異について (I)

進 野 智 子

長崎大学教育学部
附 属 幼 稚 園 竹 内 チ カ 子

“ 宮 川 芳 子

A Study of the Discrepancies in the Evaluations of a Developmental Test by Parents and Teachers (I)

Tomoko SHINNO

Chikako TAKEUCHI

Yoshiko MIYAGAWA

目 的

質問紙法による検査をする時、Cronbach (1945, 1950) は、応答の構えに注目し推量傾向、黙従傾向、批判的傾向、極端な選択肢を選ぶ傾向があると指摘している。Fiske (1971) は、測定手続きが直接的経験の報告の場合には、不注意・逸脱傾向・多産性という応答の構えが生じ、過去および現在の行動観察による測定手続きの場合には、ハロー効果、寛大傾向、位置傾向のような応答の構えが生じると報告している。また、Edwards (1957) は、社会的規範に従って回答しようとする述べている。質問紙法による検査には、これらの応答の構えが生じやすいことが明らかにされている。

このような限界をもつ質問紙法によって入園当初の幼稚園児の精神発達を調査するとき、親や教師はどのような評定を下すだろうか。精神発達の状況が諸分野に分かれている質問紙を使用し、同一の幼児について子どもの家庭での活動を見ている親と、子どもを集団の中で観察する機会の多い教師2名が評定したとき、どのような差異がみられるかを検討する。また被験児が長子と非長子、男児と女児とでは評定はどのように異なるだろうか。これらの検討を目的に本研究を進める。

手 続 ・ 方 法

被験児：1978年4月に長崎市内某幼稚園の3才児クラスに入園した幼児16名である。被験児を長子（1人っ子も含む）であるか否かによって長子群と非長子群に、また被験児の性によって男児群と女児群に分類した。

評定者および評定期間：評定者は、上記3才児の親と担任の教師2名、計3名である。親による評定は入園後約20日以内に行なわれたものであり、教師による評定は入園後2ヶ月経過した頃に行なわれた。各評定者の評定時における被験児の生活年齢は表1に示す通りである。

表1 被験児の生活年齢 (月)

被験児	評定者 生活年齢	両 親		教 師 L		教 師 X		被験児の 男女比
		平 均	標準誤差	平 均	標準誤差	平 均	標準誤差	
全 児		40.40	10.96	44.56	3.90	44.38	3.98	8 : 8
長 子 群		43.22	4.34	44.67	4.40	44.56	4.50	4 : 5
非 長 子 群		42.71	2.75	44.43	2.77	44.14	2.80	4 : 3
男 児 群		42.88	3.69	44.38	3.67	44.25	3.70	8 : 0
女 児 群		43.13	3.79	44.75	3.86	44.50	4.00	0 : 8

親による評定に際しては、幼児の日常の行動をよく知っている者にありのままに記入するように求めたところ、1名の男児のみが父親によって評定され、他は母親によって評定された。親の評定時の年齢は表2に示す通りである。2名の教師の年齢は、27才と23才である。教師Lは保育経験6年の中、3才児クラスの担任経験4年であり、教師Xは保育経験1年余、この期間を主として3才児の保育に携わっている。なお教師Xは、被験児の入園後約20日間3才児クラスの保育にあたり、その後1ヶ月間は園の事情によって他の年長クラスを担当したが、この質問紙の記入時はまた3才児のクラスに戻っている。

表2 評定者(両親)の平均年齢 (才)

被験児	平均年齢他	平均年齢		評定者の 男女比
		平 均	標準誤差	
全 児		30.44	9.08	1 : 15
長 子 群		30.11	3.82	0 : 9
非 長 子 群		35.67	3.40	1 : 6
男 児 群		33.00	4.36	1 : 7
女 児 群		32.88	5.40	0 : 8

質問紙：津守ら(1965)による「乳幼児精神発達質問紙(3~7才まで)」を使用した。

結果の整理：本質問紙は、3件法による解答を求めている。即ち、○印は明らかにできる行動、×印は明らかにできない行動、△印はできるかできないかはっきりしない行動である。結果の整理にあたっては、○印のみに1点を与え、各分野毎の素点を計算し、これを発達年齢に換算し、発達指数を算出した。この素点の計算に際し、ある分野で一つも○印のついていない被験児の場合は、発達年齢を本質問紙における最下限の年齢である33ヶ月とした。

結 果

1) 全 児 の 比 較

各領域毎の各評定者による発達指数は表3に示す通りである。表3の上欄は発達指数の平均値を下欄は標準偏差を表す。同一の幼児についての三者による評定の一致度は、表4

乳幼児精神発達検査にみられる両親評定と教師評定の差異について（進野・竹内・宮川）

表 3 全児・長子群・非長子群の発達指数

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X
全 児	143.75	124.56	159.56	124.75	81.31	110.75	125.88	77.31	119.50	135.13	109.44	115.81	135.81	89.06	132.38
	23.29	26.99	19.49	18.58	6.89	16.04	19.77	5.42	14.37	18.33	13.72	9.24	18.69	11.77	12.72
長 子 群	138.78	112.78	157.33	119.44	80.22	111.11	119.78	77.00	121.00	140.89	108.11	116.44	131.89	88.89	134.89
	21.06	27.49	19.46	16.77	7.31	19.96	12.10	6.85	17.37	21.59	16.08	10.30	21.04	12.55	14.00
非長子群	150.14	139.71	162.43	131.57	82.71	110.29	133.71	77.71	117.57	127.71	111.14	115.00	140.96	89.29	129.14
	24.42	16.88	19.16	18.57	6.02	8.70	24.42	2.49	8.78	8.40	9.64	7.50	13.57	10.67	9.96

に示す通りである。一致度はケンドールの一致係数による。各評定者間の相関関係はスピアマンの順位相関によって求められた。その結果は表5に示す通りである。なお、表4、表5において、表中の*印は有意差検定の結果5%水準で有意であることを示し、○印は10%水準で傾向の

表 4 全児・長子群・非長子群の評定の一致係数

分野 被験児	運 動	探 索	社 会	生 活 習 慣	言 語
全 児	0.60*	0.44	0.45	0.31	0.46
長 子 群	0.56	0.22	0.58	0.42	0.63
非長子群	0.62*	0.31	0.17	0.13	0.24

表 5 全児・長子群・非長子群における評定者間の相関

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P
全 児	0.08	0.58*	0.55*	0.43*	0.01	0.07	0.29	0.47*	0.09	-0.13	0.04	0.11	0.48*	0.32	-0.15
長 子 群	0.03	0.57	0.44	0.42	0.04	0.19	0.44	0.73*	-0.01	0.21	0.18	0.02	0.62*	0.59	0.20
非長子群	-0.10	0.64*	0.63	0.43	-0.24	-0.28	-0.24	-0.78	0.11	-0.65	-0.35	-0.28	0.56	-0.52	-0.38

あることを示す(以下同じ)。表5における検定は片側検定である。表5において評定者欄のPは親を表し、Lは教師Lを、Xは教師Xを表す(P、LおよびXに関しては以下同じ)。

三者の評定の一致の見られるのは運動分野のみである。以下、言語・社会・探索・生活習慣の順で一致度は低くなっていく。運動分野を除いて、全般に親の評価が教師の評価よりも高かった。また、教師間の評定については、運動・社会の分野の評定に5%水準で有意な相関関係がみられるが、全体的に教師Lの評価の方が教師Xのそれよりも低かった。探索・言語の分野においては、親と教師Lの評定間に5%水準で有意な相関関係がみられた。

2) 長子群・非長子群の比較

長子群においては運動分野・言語分野を除いて親の方が教師よりも高い評定を下し、非長子群においては運動分野を除いて親の方が教師よりも高く評定している。両群の比較をしたとき、社会の分野で教師Xが、生活習慣の分野で親が、言語の分野で教師Xが、それぞれ非長子群よりも長子群を高く評定しているが、生活習慣の分野を除いて他の分野では

有意差は認められなかった。他は長子群よりも非長子群を高く評定している。この中、 t 検定をしたところ、運動分野において教師Lの評定には、 $t = 4.49$ ($df = 14$) で、両群間に0.1%水準で有意差がみられ、親のそれには10%水準で有意な傾向がみられた。探索の分野においては、親の評定に $t = 2.70$ ($df = 14$) で両群間に5%水準で有意差がみられた。社会の分野においては、親の評定に両群間に $t = 2.94$ ($df = 14$) で5%水準で有意差がみられた。生活習慣の分野においては、教師間の評定もほぼ一致しており、その評定平均値は他の諸分野に比較して一番レンジが狭い。しかし、親の評定に関しては、長子群のそれが非長子群のそれよりも $t = 3.01$ ($df = 14$) で1%水準で有意に高い。

長子群においては言語の分野にのみ三者の評定の一致の傾向がみられた。この一致度は、社会・運動・生活習慣・探索の順に低くなっていく。非長子群においては、運動の分野において5%水準で評定の一致がみられた。この一致度は非長子群においては探索・言語・社会・生活習慣の順に低くなっていくが、一致係数それ自体は長子群の方が高い。

各評定者間の評定の相関に関しては、長子群において社会の分野で5%水準で教師間に有意な相関がみられ、言語の分野で親と教師Lの間に5%水準で有意差がみられた。探索・社会・生活習慣・言語の分野において非長子群の教師間評定に逆相関がみられた。生活習慣の分野においては、三者の評定間に逆相関がみられた。

3) 男児群・女児群の比較

各群の各評定者による発達指数の評定は、表6に示す通りである。

表6 男児群・女児群の発達指数

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X	親	教師L	教師X
男 児 群	149.38	112.75	153.13	124.88	84.38	101.38	130.50	77.38	102.63	142.25	114.50	115.38	133.25	89.25	130.38
	20.81	20.15	21.97	16.94	7.81	10.69	23.47	4.97	39.05	16.14	7.12	8.70	20.78	11.78	10.78
女 児 群	138.13	130.25	166.00	124.63	78.25	120.88	121.25	77.25	125.13	128.00	104.38	116.25	138.38	88.88	134.38
	24.26	26.29	13.94	20.09	3.90	14.76	13.72	5.83	10.62	17.61	16.58	9.73	15.92	11.75	14.12

運動分野において、両群とも教師Xの方が親よりも高い評定をしている。親と教師Lの評定は分野によって異なっており、男児群、女児群のどちらか一方を一定して高く評定する傾向はみられなかったが、教師Xは常に女児群を高く評定しており、 t 検定をしたところ探索の分野では $t = 2.83$ ($df = 14$) で5%水準で有意差がみられた。教師Lは、運動

表7 男児群・女児群の評定の一致係数

分野 性別	運 動	探 索	社 会	生活習慣	言 語
男 児 群	0.79*	0.61*	0.26	0.30	0.47
女 児 群	0.67*	0.53	0.77*	0.33	0.50

の分野において女児の方を $t = 2.80$ ($df = 14$) で5%水準で有意に高く評定し、生活習慣の分野では男児の方を高く評定する傾向がみられた。

三者の評定の一致に関しては、表7に示す通りである。三者間の評定

は、男・女両群とも運動の分野で一致していた。更に男児群においては、探索の分野で評定の一致の傾向がみられ、女児群においては、社会の分野で評定の一致が5%水準でみられた。

各評定者間の順位相関に関しては、表8に示す通りである。表中の評定者のP、L、X

表 8 男児群・女児群における評定者間の相関

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P
男 児 群	0.57	0.64*	0.83***	0.04	0.58	0.27	0.04	0.05	-0.39	0.21	-0.02	-0.18	0.38	0.35	-0.16
女 児 群	0.35	0.56	0.66*	0.71*	0.29	-0.02	0.60	0.80*	0.77*	-0.36	0.05	0.34	0.67*	0.24	-0.14

に関しては先述の通りである。また表中の有意差検定は表5と同様片側検定である。男児群においては運動分野において教師L-X間に5%水準で、また、教師Xと親間にも5%水準で有意差がみられた。女児群においては、運動分野において親と教師L間に、社会分野において両教師間と教師Xと親との間に、言語分野において親と教師Lとの間に5%水準で高い相関がみられた。

考 察

本研究は、親には入園後約20日以内に評定を求め、教師には入園後約2ヶ月経過した頃に評定を求めて行なわれた。親はこの評定をするまでに、入園後約10日後に身体測定のための保育参観を経験し、入園後間もなく実施された遠足で集団保育を観察しただけで、園での自分の子どもの活動を殆んど見ていない状態である。しかし、身体測定時における幼児の着脱衣の活動状態の観察は、自分の子どものこの分野における生活習慣の自立がどの程度であるかを直接知る機会を持ったといえよう。教師がこの評定をする頃は教育実習の期間と重なっており、非常に多忙な時期であったと推測される。評定はこのように、幼稚園に自分の子が入園したとはいうものの、園での活動状況についてあまり情報を持たなかった親と、入園後2ヶ月近く経ったとはいえ、慌しい状態の続いている教師によってなされた。ただし、この時期の教育実習ということを除けばどここの幼稚園にも共通するような状況といえよう。

また、評定後の教師の内省によると、質問項目には、運動分野内のジャングルジムでの子どもの遊び方のように園での幼児の活動状況を見ている者の方が解答し易い項目と、生活分野内の“頭を洗っても泣かない”の項目のように、園での活動状況からだけでは判断しかねる項目があったということが述べられた。このような判断が困難な質問項目について、教師Lは過去の経験から判断をし、教師Xは園で顔を洗ったときに頭が濡れても平気な幼児には○印をつけるというように、日常の他の行動からその可能性について類推することが多かったと報告された。さらに、教師Xは被験児の入園直後約20日間にわたって幼児の活動を見、途中1ヶ月間の年長児クラスの担任という3才児との接触の空白期間を経て当該クラスに戻ったとき、1ヶ月間の幼児の成長に驚いたと述べた。年長児でも不可能だった活動を3才児がしたときに、それに類似の場面での活動まで可能と評定したことが報告された。教師Xの評定にはハロー効果が働いたといえるだろう。

上述のような理由で、教師Lは教師Xよりも低めの評定を下し、教師Xは経験から判断

することよりも、個々の行動についてその可能性を類推するような判断をしたために全般的に高い評定を下したといえる。

以下、考察を結果の分類に従って進めていくことにする。

入園当初の状態、教師は園児の運動分野・社会分野の行動が把握し易く、また教師の眼も主としてこの2分野に注がれる傾向にある。さらに、この園では「健康」の分野の研究テーマの下に全園あげてこの課題に取り組んでおり、5～6月に園児の体力調査や運動能力測定が行なわれたため、客観的に園児の行動を把握できたことが、教師間の運動分野での評定の高い相関となり、また、三者間の評定の有意な一致の原因と考えられる。先述のように入園児の社会性を重視する傾向が、教師間の社会の分野での高い相関となってあらわれた。教師の眼が社会・運動分野に注がれるのに対して、親の関心は言語に向けられることが明らかにされた。

園児を長子と非長子群に分類したのは、親がこの種の質問紙による検査の経験があるか否かについて検討することを意図したものであった。長子群に関しては、唯一人生後11～13ヶ月までの2ヶ月間保育園に入園していた幼児がいるが、この幼児の親も経験はないとみなしてよいだろう。長子群の場合はこの種の検査に関して無経験な親であると思われるが、非長子群については、このことについて直接的に尋ねていないので、断定はできかねる。生活習慣の分野を除いて全般的に親の評定は長子群の方が低いことから、この種の質問紙法の解答の経験のない者に評定のかたよりがあるとは一概にいえまいだろう。両群間の親の評定に有意差のみられたことは、長子群の親がこの分野に深い関心を持っていることを示唆すると思われる。教師Lは運動の分野についてのみ、非長子群を長子群よりも高く評定している。親は、運動・探索・社会の分野で非長子群の方を有意に高く評定している。非長子群の方が日常生活において活発な活動を許容される状態にあり、また年長児の活動を観察したり模倣したりする機会に恵まれていると考えられる。探索の分野においても、長子にははさみを与えられないなど親の過保護な養育態度に比し、非長子群の親の経験にもとづく余裕ある養育態度がこの差を生み出しているといえよう。生活習慣の分野の三者の評定の逆相関は先述のように、質問項目中に家庭での生活に関する項目が多く、その判断の基準が一定していなかったこと、それにもかかわらず、男児群の教師LとXの評定および女児群の親と教師Lの評定のちらばりの差が少なかったことによるとと思われる。言語の分野における長子群の評定に一致の傾向のみられたことは、先述のように親の関心の高さを示すものと思われる。

男・女児群の運動の評定に関しては高い一致がみられることは先述のような理由がここでも考えられるであろう。女児群の評定において、探索・言語の分野で教師Lと親の間に高い相関がみられたこと、教師Xと親の間で運動・社会の分野に有意な相関がみられたこと、また社会の分野で三者の評定に有意な一致があったことは、評定者がすべて女性であったことと関係があるのではなからうか。即ち、同性の幼児を評定者の理想水準と一致させようとする傾向はなかったのだろうか。教師Xが常に女児の方に高い評定を下していた事実と関連して、評定者と被験児の性との関係は多くの問題を示唆するように思われる。

親と教師による評定が、時間の経過に伴ってどのように変化するかに深い関心がもたれる。

要 約

3才児16名の入園後約20日経過した時点で親に、入園後約2ヶ月経過した頃に2名の教師に同一の幼児について津守式乳幼児精神発達検査を実施した。その結果以下の事が明らかにされた。

1. 親の方が幼児の精神発達に関して常に教師よりも高い評定をするとは限らない。
2. 非長子群の親は、生活習慣の分野を除いて長子群の親よりも常に低い評定をした。
3. 三者の評定は、全児の運動分野において一致がみられた。
評定の一致は、非長子群の運動分野、男児・女児各群の運動分野、女児群の社会の分野においてみられた。
三者の評定の一致の傾向は、長子群の言語の分野、男児群の探索の分野にみられた。
4. 教師間の評定は、発達程度の評定には高低の違いがみられたが、男・女児群の運動分野、女児群の社会分野の評定に関しては被験児間の順位づけはほぼ同一であり、高い相関がみられた。
5. 運動分野の評定の一致は園の年間研究テーマとの関連も示唆される。

引 用 文 献

- Cronbach, L. : Further evidence on response sets test design. *Educ. psychol. Measmt.*, 1950, 10, 3-31.
「心理検査における反応の心理」 岩脇三良 日本文化科学社, 1973. より引用。
- Cronbach, L. : Response sets and test validity. *Educ. psychol, Measmt.*, 1946, 6, 475-494.
前掲書より引用。
- Edwards, A.L. : The social desirability variabls in personality assessment and resaerch. New York; Dryden, 1957.
前掲書より引用。
- Fiske, D. W. : Measuring the concepts of personality. Chicago; Aldine, 1971.
前掲書より引用。

参 考 文 献

- 津守真・磯部景子 乳幼児精神発達診断法 3才～7才まで 大日本図書, 1977.